

鹿児島県立川内高等学校

校長通信

第2号 (令和8年4月30日/校長 大倉秀心)



校訓「自律 敬愛 剛健」

鹿児島県薩摩川内市御陵下町6番3号



電話 (0996) 23-7274

FAX (0996) 22-1542



全校応援

令和8年度が始まり、あっという間に4月が終わろうとしています。生徒の皆さんは新年度の新たな環境に慣れたでしょうか。

今年度は野球部が35季ぶり5回目となる九州大会出場で新年度のスタートを大いに盛り上げてくれました。試合時間の関係で全員の参加はできませんでしたが、鹿児島県開催であるアドバンテージを活かし、授業を早めに切り上げ、「全校応援」をできたことは皆さんの高校生活の貴重な体験となったでしょう。この「全校応援」で川内高校生の団結が一層増したように感じました。この体験もまさに私がいつも言っている、「川内高校生だからできること」「川内高校生にしかできないこと」なのです。

自分の学校の仲間たちを全校で一杯応援する。幸運にもこのような機会に恵まれたのであれば、自ら主体的に関わり、そこで感じたこと、考えたことを大切にして、自己の感受性を高めてほしい。そう思わずにはいられないのです。

応援すること、されること

今回、野球部の皆さんは自らの力で九州大会出場の権利を勝ち取りました。実にあっぱれな結果です。それにより全校応援まで受けることができ本当に幸せだったと思います。

ただ、見方を変えると、全校生徒の応援を受けながらプレーできた野球部の皆さんが幸せであることはもちろんのこと、全校応援をした生徒の皆さんも、自分の学校に全校で応援させてもらえる部活動がちょうど在学中に存在したということは同様に幸せなことだと思います。多くの高校生が体験できないことを年度当初に体験できた。このことを謙虚に有り難いことだと受け止め、高校生活の一場面一場面をプラス思考で過ごしてほしいと思います。

松下電器産業株式会社(現パナソニック)の創業

者・松下幸之助は、採用面接で次の質問をしていたといいます。

「あなたは運のいい人間だと思いますか。」

そして、この質問に対し「はい」と答えた人しか採用しなかったそうです。自分は決して運の悪い人間ではない。「いろんな人たちのおかげでここまで来れた」とか、「自分の身の回りで起きている出来事は、一見ネガティブに見えることでも、巡り巡って結局は自分を成長させてくれている」というように、物事をプラス思考で捉えられる人間でないと、0(ゼロ)から1(イチ)を生み出すような商品開発には携われないということなのかもしれません。これから長い人生を送る生徒の皆さんにも、こういうマインドセット(mindset: 心の持ちよう・思考の癖)を持ってもらいたいと思います。

「応援したい」と思えるか

「応援」のことをあれこれ書いていたら、十数年前の出来事を思い出したので紹介します。

私はJRの列車に乗っていました。時刻は夕方。乗客は仕事帰りと思われる人たちや下校中の高校生たちに一般の人も加わって、車両はそこそこ混んでいます。空いている席はありません。私も立っていました。

そこで私はある光景に目がとまります。高校名の入ったジャージを身につけた体格のいい高校生が座席に浅く腰掛け、大腿を開いた長い足を通路に投げ出している。そして寝ている。信じられないことに横の座席には彼のものと思われる大きなスポーツバッグがドカッと置かれている。その周辺で立っている人の中には、比較的年配の方も何人かいらっしゃって、中でも一人、重たそうなバッグを持った老婦人が私は気になっていました。

何かのはずみでこの高校生が目を覚まし、自分が立ち上がりずとも、せめてバッグをどかしてこの老婦人を座らせてくれないかなど淡い期待を寄せていましたが、どうにも目を覚ます気配はありません。逆に、「俺は練習で疲れているんだ!」という雰囲気は彼の周りに充満している。

私はこの状況に違和感、というよりも不快感を覚え、気づいたときには彼の肩を指でちょんちょんとたたき、目を覚ました彼に、周りの状況を見てくれとジェスチャーで合図しました。

これに対し彼は、「チッ...」と舌打ちをしバッグを体の前に抱えると再び眠りだしました。とりあえず、一人分空いた座席に先ほどの老婦人に座っていただき、最悪の状況は抜け出したのですが、何か釈然としない。そんな出来事でした。皆さんはこれを読んでどう思いますか。

自分の学校の生徒ではないとはいえ、教員をしている身としては、「これでいいのかなあ」という思いが拭いきれませんでした。

この生徒の服装から見て、所属している部活動は一目瞭然でした。高校名はジャージに書いてある。全国大会常連のこの高校の部活動を、私は同郷の人間としてそれまでは応援していましたが、この日以来応援することをやめました。その高校のその部活動は、きっと彼みたいな生徒ばかりではないと思ってはみるものの、やはり素直に心の底からは応援できない。たった一人の生徒の行動で、その高校は一人のサポーターを失ってしまったということです。人の心とはそういうものなのです。

結局は「人間力」

なぜこんな話を今持ち出したのか。それは、多くの生徒が部活動に所属している川内高校生には、一生懸命取り組んでいる部活動において、周りの人たちから素直に応援してもらえるような存在になってほしい、そう思うからです。

先ほどの話に出てきた高校生は、レギュラーメンバーなのかどうかは分かりませんが、いくら厳しい練習で自分の体が疲れているとはいえ、列車内の状況を見たときに、高校生にもなれば自分がとるべき行動を

即座に理解すべきだと私は思います。それが理解できないということは、彼が部活動を通して、そこまで「人間力」を培っていないということに他なりません。

17歳・18歳の若者のスポーツを通しての体の疲労具合と、その何倍もの長い人生を生きてきたご老人が重い荷物を抱えて列車に揺られてふらふらしている状況を比べた場合、どちらを優先的に配慮すべきかは、小さな子供でもわかる話でしょう。「強ければ何をしても許されるのか?」「競技力が高いというだけで、お前はそんなに偉いのか?」そう思わざるを得ないのです。

体育系であろうと文化系であろうと、集団競技であろうと個人競技であろうと、強豪チームであろうとなかろうと、部活動を通して培ってほしい力は、技術力ばかりではなく、自己中心的なオレ様思考に陥らず、部活動に打ち込むことができる環境や周囲の人たちへの感謝を忘れず、自分が生活する社会において様々なことに配慮ができる力なのです。これが部活動の意義といっても過言ではありません。そしてこれが「人間力」のベースになるのです。

部活動「以外」の時間

このように考えていくと、大切なのは部活動「以外」の時間にあることが見えてきます。部活動で活動中は、真摯に取り組み周囲の人たちへの挨拶等もしっかりできているように見えても、列車で私が出会った高校生がそれを証明しているように、部活動「以外」の場面でその生徒の本性が露呈してくる。このことを生徒の皆さんは忘れないでください。

よく「文武両道」と言われますが、結局、勉強に手を抜いている生徒が、部活動でも「ここぞ!」という場面で力が発揮できないのは当然のことなのです。部活動「以外」の時間の自分が本来の自分なのだとすれば、まずはそちらの自分を鍛えなければならない。勉強にしろ、家族や地域の人たちとの関わりにしろ、部活動「以外」の自分の姿にスポットライトを当て、自分がどういう行動をとるべきかをよく考える。部活動の時間よりも圧倒的に長いこちら側の時間の中で、妥協せず自分を鍛える。そうすることで高まった「人間力」が部活動の技術向上を促し、結果にもつながってくる。これが本来の部活動の姿ではないかと思えます。